



東洋英和女学院

# 史料室だより No.93

2019.11.6 発行  
東洋英和女学院  
史料室委員会



(画像：United Church Archives, Toronto. 93.049P/4078.より。1942年から1945年の間に撮影)

## ★ ミス・ハミルトン (左) とミス・ハード (右) レモンクリークの新居にて

東洋英和女学院の第15代・17代校長を務めたミス・ハミルトンの第二次世界大戦中のカナダでの日系人強制収容所における活動を紹介する番組がNHK WORLD PRIME (番組名Hope in the Dark、<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/ondemand/video/3016050/> NHK world On Demandで2020年8月24日まで視聴可能)、NHK ETV特集で放送されました。先生がたの活動については本号の特集記事をご一読ください。

## ★ 目次

特集 1	カナダ婦人宣教師の教育支援： 第2次世界大戦時の強制収容された日系カナダ人生徒への支援 筑波大学図書館情報メディア系長・教授 溝上 智恵子 氏 ……	2
報 告	四つの教会 ―〈桜プロジェクト〉植樹5周年記念ツアーに参加して― 山本 香織 ……	6
〈資料紹介〉35	ブロムさん寄贈 ミス・カートメルのWMSのバッジ……………	8
特集 2	大学開学30周年に寄せて 池田 明史 ……	9
〈東洋英和の先生がた〉3	池田 守男先生 与うるは受くるより幸いなり ―サーバント・リーダーシップに生きる― ……	12
利用統計／史料室の活動より (2019年4月～2019年9月) ……		14
村岡花子文庫展示コーナーご案内 村岡花子と「家庭文学」……………		16
おしらせ ……		16



## 第2次世界大戦時の強制収容された日系カナダ人生徒への支援

溝上 智恵子

## 1 カナダ婦人宣教師と教育

明治以降、カナダの宣教師たちが来日し、日本の女子教育推進に大きな貢献を果たしたことはよく知られている。その中心的存在だった婦人宣教師を日本へ派遣した組織がカナダ・メソジスト教会（1925年にカナダ合同教会）の婦人ミッション（Woman's Missionary Society：WMS）である。婦人宣教師の中には、太平洋戦争開戦後、カナダへ帰国させられたにもかかわらず、到着後、強制収容されていた日系カナダ人の教育支援に携わった者も少なくない。東洋英和のハミルトン（Frances Gertrude Hamilton）、山梨英和のグリーンバンク（Katherine Greenbank）、静岡英和のマクラ克蘭（Annie McLachlan）たちである。カナダでも隣国米国と同様に日系人が強制収容された中、彼女たちは子どもたちをどのように支援したのだろうか。ここでは戦時中の日系カナダ人対象の学校教育概要と、収容所の1つであるレモンクreekにおける彼女たちの活動の一端を紹介したい。

## 2 戦時中のカナダにおける日系人収容

第2次世界大戦前、北米に渡った日系人は厳しい人種差別に直面した。カナダでも日系人の9割近くが集住していたブリティッシュ・コロンビア州（BC州）では特に排日気運が高く、例えば日系人は師範学校を卒業しても、州内の公立学校教員になることはできなかった。

こうした状況下で1941年12月に真珠湾攻撃が勃発すると、カナダも直に対日戦争に参戦し、一連の日系人政策が開始された。当時、BC州には約2万人を超える日系人が住んでいたが、1942年1月に太平洋沿岸から内陸へ100マイル（約160km）の地域が防衛地域として設定され、1942年2月24日、枢密院令第1486号により、当該エリアからすべての日系人の立ち退きが決定された。すべての日系人には、カナダ生まれ・カナダ育ちの日系2世も含まれた。具体的な移動計画は、（1）バンクーバーとスティーブストンの日系人を除く防衛地域内に居住する日系人をバンクーバーのヘイスティングス公園内に設けた収容所にいったん収容する、（2）その



東洋英和のハミルトンも強制収容所での教育活動に従事した

後バンクーバーとスティーブストンの日系人も含めた全日系人を、道路キャンプ、砂糖大根栽培、自由移動、自活移動、ゴーストタウン及び、内陸部に特設するキャンプに送り出すというものであった。移動方法は1942年2月28日までに自分で職をみつけて移動する者（自由移動）には自動車の使用を認めるが、それ以外の者は連邦警察の監督のもとブリティッシュ・コロンビア保安委員会（BCSC：1942年3月創設）が手配するバス、汽車、連絡船を使用する、なお白人を配偶者にもつ日系人とその子弟は移動対象者とはしない、移動に反対する者は敵性外国人として国防省管轄の捕虜収容所に抑留する等という計画であった。こうして約2万人の日系カナダ人の強制移動と強制収容（以下、強制収容）が開始されたのである。

カナダ合同教会は日系人支援のため収容先にミッションナリーの派遣を決め、WMSも日系人の強制収容が決定した翌月（1942年3月）の委員会で、日系人の福祉に関してあらゆる支援を行う旨を議決し（WMS, The Minutes）、日本から戻った8人の海外婦人宣教師と3人の国内婦人宣教師を派遣している（WMS 1942-43）。

## 3 強制収容先の学校教育

カナダは1867年の連邦結成以降、憲法上の規定により、教育は州政府が管轄している。強制収容先の学校教育も、憲法上はBC州政府の管轄だが、州政府が拒否したため、連邦政府機関であるBCSCが

約2,600人の児童を対象に初等教育のみを提供することとなった。

BCSCが提出した教育計画を連邦政府が最終的に認可したのが1942年11月19日であり、同年12月中旬以降にようやく小学校が各収容所に設置されることになった (Dept. of Labour)。

なお当時のBC州では義務教育は15歳までだったが、高校教育は原則無料だった。しかし日系人の強制収容にかかる経費を最小限におさえることとBC州以東への移動を最優先させたい連邦政府は、高校教育を提供しなかった。連邦政府も州政府も提供しない高校教育を支援することに乗り出したのがキリスト教教会関係者だった。連邦政府は、教会が運営する学校には、希望すればBCSCが提供した小学校の授業時間終了後に、教室として使用することを許可している。

もっともすべての教会関係者が日系人支援に賛同していたわけではない。例えば合同教会でも、日系人の強制収容をめぐって一部関係者は支援を行い、あるいは強制収容を批判する意見を述べたが、多くの信者や関係者は沈黙したままだった。こうした状況の中で、WMS派遣の婦人宣教師が政府の提供しない幼稚園や高校の教育支援の中心的担い手となった。1943年にタシメを訪問したWMSのラベイス (Isobel Loveys) は、政府が担うべき役割を教会が担当していることについて疑問が出ているが、街 (タシメ) は、1943年3月16日時点で人口2,648人で、481人の男子生徒や551人の女子生徒、600人の児童が立つスペースも座るスペースもなく、すべきこともなく、他にやることもない現実があり、教会はすべきことをしているのだと述べている (Loveys)。

右表が示すように、1943年9月、合同教会はニューデンバー、レモンクリーク、タシメの3カ所で3人の良心的兵役忌避者も教員として雇用し、高校教育を開始した (WMS 1943-44)。

教会関係者が運営した高校では、BC州の通信制高校教材が使用された。しかし生徒が個人で登録料を支払うことで、正規の通信制高校教育の受講が可能になった。もっとも18歳以下のBC州民は授業料無料で受講が可能な制度だったにもかかわらず、日系人生徒は年間1人あたり2ドルの登録料に加え、1科目あたり授業料は州外生の受講料が適用され、さらに試験の受験料も1教科1ドルの有料とされたのである。WMS年報1944-45年は、高校教育について、教会が運営する学校でトレーニングを受けた白人教員のもと、約1,000人の生徒が教育を受けていると報告している (WMS 1944-45)。

表 収容所別教会設立高校

収容所名	教会関係者設置の高校	支援教会名／備考
グリーンウッド	Sacred Hearts School	カトリック教会 (アトメント会) 1942/10開校 及び地元の公立学校受入
カズロ		地元の公立学校受入
サンドン	Sandon Catholic High School	カトリック教会 (キリスト・ロア宣教修道女会) 1943/9開校
ニューデンバー	Notre Dame High School	カトリック教会 (天使の聖母宣教修道会) 1943/4開校
	Lakeview Collegiate	合同教会1943/9開校
スローカンシティ	Slocan Catholic High School	カトリック教会 (聖母被昇天修道会) 1943/9開校
	Glenmore High School	聖公会1944/9開校
		及び地元の公立学校受入
レモンクリーク	Lemon Creek High School	合同教会1943/9開校
タシメ	Tashme High School	合同教会1943/9開校

#### 4 レモンクリークの高校教育

強制収容先の1つであるレモンクリーク収容所は、1942年11月時点における収容者数が1,851人と、単体の収容所としてはタシメにつぐ大きさだった (Reid)。タシメとレモンクリークは、いわゆるゴーストタウンの空き家を利用した収容所ではなく、新たにバラック小屋 (14ft (4.3m) × 28ft (8.5m) : 3部屋で2家族同居) を建設して日系人の住居とした収容所である。バラック小屋完成前に多くの日系人が到着したため、テントでの生活を余儀なくされた (JCCCHP)。付近に「白人」コミュニティはなく、突然2,000人近い日系人のみが集住する収容所が建設されたのである。次頁の写真は現存するバラック小屋でニューデンバーの日系収容記念センターとなっている。

合同教会は、1942年9月にハード (Helen Hurd) を、11月には日系人のコミヤマ牧師をレモンクリークに派遣した。BCSCの小学校開校までの間、日系人の親たちの要望に応じて、1年生から4年生までの学校も開校し、200人の児童が学んだ (WMS 1942-43)。

この地にハミルトンが着任したのは1943年1月19日である (WMS 1943-44)。ハミルトンは



ニューデンバーの日系収容記念センター

1942年6月に日本を発った第1次日米交換船で、インド洋や大西洋経由でカナダに戻った（弘中）。彼女がレモンクリークに到着した時、小さな幼稚園の部屋があるだけで、教会も学校の校舎もなかった。ようやくBCSCの小学校が開校したのが1943年4月で500人超の児童が通っているとハミルトンは報告している。しかし60人近い少年少女たちに高校教育は提供されることが判明したので、ハミルトンは、1943年3月にビクトリアのBC州教育省へ赴き、通信教育担当のルーカス（Edith Lucas）に相談し、6月に通信教育の単位認定試験が受けられるよう手配した。多くは試験に合格するものの、さらなる勉強意欲が募ったことから、ハミルトンたちは必要な資金と教員を確保することで高校設立に向けて動き出した（WMS 1943-44）。

1943年9月7日、73人の生徒を迎え、教員はフルタイム教員がアーウィング（Donald Ewing, Mr.）、エビスザキ（Kentaro Ebisuzaki, Mr.）とハミルトンの3人、パートタイム教員としてハード、コミヤマ牧師、エイビス夫人（Avis, Mrs.）、ムラセ（Yutaka Murase, Mr.）とニューデンバーのロー（John Rowe, Mr.）の5人、計8人という陣容で開校した（WMS 1943-44）。校舎は小学校を夜間に高校用として転用する形で始めたため、照明、教育時間や課外活動の実施等に多々課題を抱えてのスタートだった。

その後、グラント（Joe Grant, Mr.）、ショウラー（Frank Showler, Mr.）やヒラヤマ（Molly Hirayama, Miss）が加わり、これで全科目をカバーできたと合同教会の資料は記している。生徒数が増えたこともあり、保護者の協力で、1944年には新校舎も建設された（JCCCHP）。

1943年9月、通信制高校責任者のルーカスからレモンクリークのハミルトン宛に、戦時中発行が認

められた日系新聞のニューカナディアン紙に掲載された通信制高校に関する記事（料金）に間違いがあるので、訂正を申し入れた手紙が届いている（Letter 1943/9/29）。1944年7月にはサンดอนのカトリック教会が運営していた高校が発行した成績証を参考に生徒の単位を認定したいと通信教育担当者に尋ねると、「Junior Chorus」は選択科目として通信制高校では提供していないので、この単位は認定できない旨、返信されている（Letter 1944/7/31）。ハミルトンの学校は正式な私立学校としては認可されていないため、通信制高校の内容にそった単位の履修がもとめられていたのである。

こうした中、ハミルトンは自分たちの運営する学校を正式な私立学校として認可させるべくBC州教育省と交渉していた。1945年2月に再度教育省に、自分がコロンビア大学で修士号を取得（1923年）し、13年間も「東京の大きな女子校の校長」として勤務していたことなどの経歴を知らせ、認可してほしいことを依頼している（Letter 1945/2/24）。



レモンクリークの日系収容記念プレート

終戦間近の1945年春に、連邦政府は16歳以上の日系人に対して日本への「本国送還」か、ロッキー山脈以東への移住のいずれかを選択せねばならない調査を実施した。本国送還署名者が6,884名、扶養家族3,503人を含めると日系カナダ人の約43%が日本への送還意思を示した（モリツグ）。タシメやレモンクリークは本国送還者のための中継収容所となり、強制収容所間の移動が始まった。レモンクリークでは日本帰国を念頭に裁縫や日本語教育を進めるべきではないかと考える者も出てきたが、終戦後の1945年秋の新学期を迎えた時、生徒数は117人を数えている（WMS 1945-46）。ちなみに日系人が西海岸へ戻ることが許されたのは1949年4月1日である。

1946年6月にレモンクリークの高校教育支援は終了し、ハミルトンも1946年9月7日にレモンク



レモンクリーク収容所跡

リークを発った (WMS 1946-47)。今、レモンクリーク収容所跡は広大な草原となっている。

## 5 まとめ

開戦後も日本に留まった6人のWMS婦人宣教師はカナダ帰国後全員が日系人支援にあたった。支援策の1つである収容所の高校教育自体は、わずか3年間という短期間の提供だったが、婦人宣教師たちは、生徒や親の「学びたい」という熱意に応えるだけでなく、戦後のキャリア形成まで考えていたと思われる。そして、3年間の高校教育支援が終了すると、彼女たちの中には、再び戦後間もない日本に戻り女子教育を支援した者がいる。ハミルトンもその1人である。

2019年はカナダの公使館が日本に設立されて90年目にあたる。両国の交戦という困難時にも教育を通じて、日系人コミュニティを支援したカナダ人の先達がいたことを私たちの記憶にとどめたい。

### 【おもな引用文献】

・弘中真由美「ミス・ハミルトンと交換船」『史料室だより』No.66、東洋英和女学院史料室委員会、

2006年

- ・ フランク・モリツグ編著、訳者代表 小川洋・溝上智恵子『ロッキーの麓の学校から：第2次世界大戦中の日系カナダ人収容所の学校教育』東信堂、2011年
- ・ Department of Labour, *Report of the Department of Labour on the Administration of Japanese Affairs in Canada 1942-1944*, Department of Labour, 1944.
- ・ The Japanese Canadian Christian Churches Historical Project (JCCCHP), *A History of the Japanese Congregations of the United Church of Canada (1892-1959): A Pathway Through the People of Grace*, The Japanese Canadian Christian Churches Historical Project, 1998. (JCCCHPの人名は表記ミスが多いので、WMS年報や他の資料で確認した氏名表記に変えている)
- ・ Loveys, Isobel McIntosh, “A Visit to Tashme, BC”, WMS The Missionary Monthly, July 1943.
- ・ Reid, Linda Kawamoto & Beth Carter, *Karizumai: A Guide to Japanese Canadian Internment Sites*, Second edition, Nikkei National Museum, 2013.
- ・ WMS, WMS Annual Report 1942-43, 1943-44, 1944-45, 1945-46.
- ・ WMS, The Minutes of the Home Missions Committee, March 1942.
- ・ Letter to Miss Gertrude Hamilton, Lemon Creek from Edith Lucas 1943/9/29付け BC Archives GR-1219 Box2 File 2.
- ・ Letter to Miss Gertrude Hamilton, Lemon Creek from Edith Lucas 1944/7/31付け BC Archives GR-1219 Box2 File 2.
- ・ Letter to Hon. T.W. Hall, Registrar, Department of Education, Victoria, from G. Hamilton 1945/2/24付け BC Archives GR-1219 Box2 File 3.



### 〈執筆者プロフィール〉 溝上 智恵子 (みぞうえ・ちえこ)

筑波大学図書館情報メディア系長・教授。専門は北米地域の教育政策。長年、第2次世界大戦期における日系カナダ人の学校教育に関する研究に取り組んでいる。著書に『世界のラーニング・コモンズ』『ミュージアムの政治学』などがある。

※溝上先生には2019年度 村岡花子記念講座 第1回講座「カナダの日系人強制収容所における東洋英和宣教師の教育支援活動について」(2019年11月16日開催) もご担当いただいております。



## 四つの教会

## —&lt;桜プロジェクト&gt; 植樹5周年記念ツアーに参加して—

小学部長 山本 香織（史料室委員会委員長）

2014年6月に実施された、同窓会有志発起に始まる「<桜プロジェクト>ありがとうを桜に託して」桜植樹カナダ旅行の土産話をうらやましく伺いながら、私がカナダに行けるのは退職後のこと、とあきらめていました。しかし今年の「<桜プロジェクト>植樹5周年記念ツアー」（2019年5月1日～6日）は、なんと前代未聞の「ゴールデンウイーク十連休」にすっぽり収められた企画。もうこれは行くしかなかったです。

そうして参加した同窓生・英和関係者10名の方々とご一緒の、5年目の桜のお花見と、ゆかりの地、ゆかりの人々を訪ねる5日間のカナダの旅は、充実していて、楽しくて、夢のようでした。心から参加してよかったと思いました。ただし例年この時期が満開らしいのですが、今年のカナダは寒くて、桜はつぼみ、私たちは冬支度でした。

私にとって長年の「憧れの地」、東洋英和のルーツであるカナダに自分の足で立ち、空気を吸って、目で見て、耳で聞いて、私は分かっていることだらけだったということが分かりました。東洋英和の始まりについて、カナダの方々の東洋英和、そして日本への愛、ささえ、祈りについて初めて実感し、身が引き締まる思いがしました。

今回の旅で訪ねた四つの教会を紹介することで、私の思いをお分かちできたら幸いです。これらの教会訪問のお膳立てをすべてしてくださった、カナダ合同教会の有賀誠一牧師に、心から感謝いたします。

◇ カナダ合同教会 ニュー・ビジョン合同教会  
（オンタリオ州ハミルトン市 市街地）

東洋英和の歴史の一頁に、創立者ミス・カートメルのお名前とセットで出てくる「センテナリー教会」。カートメル先生が所属し、日本への婦人宣教師として



任命され、送り出された教会として馴染み深く、英和関係者が一度は訪ねてみたいと考える教会です。

ハミルトン市の中心に位置し、今は大きなビルに囲まれてはいますが、カートメル先生の頃と変わらない外観です。しかし残念ながら中身はすっかり変わってしまい、名前ももう「センテナリー教会」ではありません。別の教会と合併して今は「ニュー・ビジョン合同教会」となり、自由な神学により活動する教会となっています。

今回教会側は私たちの訪問を快く受け入れ、海外宣教師派遣をしていた「センテナリー教会」時代の写真を並べ、お茶のおもてなしをしてくださいました。しかしカートメル先生が祈りをささげ、神からの召命を受けた礼拝堂は長椅子が取り払われ、大きなステージで講壇の前がふさがれ、自由な形式での礼拝の様子が想像されるものでした。

それでも私にとって「センテナリー教会」に入れたことは大きな喜びです。カートメル先生のお心に思いを馳せながら、同じ空間を味わいました。

◇ カナダ合同教会 セント・ポールズ合同教会  
（オンタリオ州ハミルトン市ダンダス）

<桜プロジェクト>を実現に導き、『カナダ婦人宣教師物語』の英訳もしてくださった、有賀誠一牧師ご夫妻の出席教会で、ケギー宣教師（学院着任1908年）と、サンダース宣教師（学院着任1931年）の母教会でもあります。有賀先生は元センテナリー教会牧師のアーウィン先生方と、この教会を舞台に、カナダと東洋英和との絆をますます深める計画を画策中です。また<桜プロジェクト>により植樹された「桜公園」に近く、これからも教会の皆様で、桜を見守り続けてくださるそうです。

2年前に大改修されたばかりの内装・ステンドグラスが美しく、アクティブに音楽活動、教会学校、青年の活動などがなされている教会で、教会員の皆様が明るくお元気なことが印象的でした。今回私たちが、お心のこもったランチョンと、ハンドベ



ルグループの演奏、オルガニストの演奏などで大歓迎してくださいました。

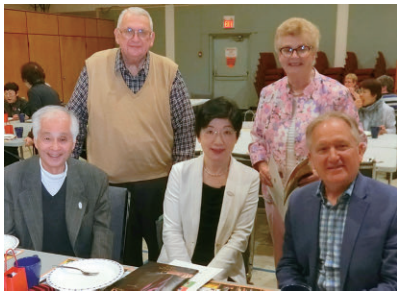
#### ◇ カナダ合同教会 トリニティ教会 (オンタリオ州ソロルド市)

マーサ・J・カートメル先生生誕地に近いので、一族が通い、マーサ本人も幼児洗礼を受けた教会ではないかと考えられています。現在ソロルド在住のカートメル家の子孫（マーサの兄の曾孫ミセス・カー夫妻）はカトリック教徒なので、トリニティ教会とは関係ありません。

ミセス・カーのご希望により、市当局も動いてくださり、＜桜プロジェクト＞による植樹がソロルド市にも実現した経緯があります。わが町が生んだ偉大な婦人宣教師により創立された、日本のTOYOEIWAが今や大きな学園になっていることをソロルド市は誇りとされ、桜並木を「カートメルウェイ」と名づけ、管理を約束してくださっています。



トリニティ教会でも皆様方私たちを大歓迎し、会場を飾り、ランチョンを用意してくださいました。ソロルド市長さんも、カートメルウェイでの記念会から全行程参加してください、私が持参した、5年生による創立者とカナダの皆様への感謝の色紙をご覧になって、制服の小学部生の写真に「ラブリー！」を連発し、私のオフィスに飾ります、とおっしゃっていました。



(前列右) ソロルド市長 Terry Ugolini氏  
(前列左) 有賀誠一牧師  
(後列) カートメル先生の兄の曾孫ミセス・カーご夫妻

#### ◇ リースクデール教会 (オンタリオ州リースクデール)

四つめの教会は東洋英和と直接の関わりはありません。『赤毛のアン』の作者ルーシー・モード・モンゴメリの牧師である夫が仕えた(1911~1926年)教会です。現在は教会としての機能は持たず、観光地として、あるいは催しの会場となっている教会です。

しかし、やはりここでも英和を強く感じるようになります。私たちはリースクデール教会で礼拝を守ったのですが、近隣の教会で牧会をされている、山梨英和出身の保坂英子牧師の説教を伺いました。

保坂先生は山梨英和卒業後カナダ合同教会牧師となられ、以来ずっとカナダ在住です。神様の、遠くカナダを介しての日本へのお働きに深く感謝をおぼえる礼拝となりました。

初めてお会いするのに、そこは同じくカナダ生まれ



の姉妹校卒同士。教会の集居室でのモンゴメリ協会が準備くださったおいしい紅茶とスコーンのティータイムは、保坂先生とのなぜか懐かしく、温かい、素晴らしいひと時となりました。

今回ダングスの桜公園では、教会や地元の関係者の方々も一緒に5周年記念式が行われ、私が学院代表としてのスピーチで、感謝と変わらぬ友好をお伝えすることができました。式が終わった後のこと



です。近所に住むという男性の方が、季節ごとに変化する桜を楽しんでいます、と話しかけてくださいました。こうして町の皆様喜んでいただくことこそ、桜プロジェクトの目指すところでしょう。東洋英和がカナダからいただいたたくさんのお恵みに、少しでもお返しができているとしたら嬉しいことです。

私にとってこれまで東洋英和の歴史上の出来事は、ただ「知識」として知るもの、紙上に貼りついて動かないものでした。しかしこうして学院創立に関係する方々、教会、町に直接感謝を伝えることができ、さらにそれらが喜びをもって受けとられ、TOYOEIWAが誇りにされている…、という双方向の息づかいを実感したのです。

今回の旅で「歴史を知る」ことにとどまらず、「カナダと東洋英和のこれから」について目を向ける、という大切な視点を与えられました。有賀誠一先生は、未来に向かってカナダと東洋英和との新たな友好の歴史を築くための行動を、すでに起こしてください、と促されています。東洋英和とカナダとの関係を、過去のものにしてしまってはなりません。これからもますます深めていくもの、と認識していきたいです。

## 〈資料紹介〉 35

### ブロムさん寄贈 ミス・カートメルのWMSのバッジ

2019年4月、学院創立者ミス・カートメルの姪メイベル・ペスコットの孫・曾孫にあたるアンステイス・ブロム (Anstice Blom) さんとメアリー・アンステイス・ブロム (Mary Anstice Blom) さんが初めて来日し、4月17～18日の2日間にわたり東洋英和をご訪問くださった。幼稚園・小学部・中高部および大学において授業や校舎の見学をなさり、在校生や教職員と様々な交流の時がもたれた。また中高部の英語礼拝ではアンステイスさんが奨励をしてくださり、ご親族ならではの話をうかがうことができたのも貴重な機会であった。



アンステイス・ブロムさん(右)とメアリー・ブロムさん(左)。学院資料展示コーナーのミス・カートメルの写真の前にて

アンステイスさんのお祖母様とお母様は、ミス・カートメルが晩年を共に過ごされたご家族であり、その関係でミス・カートメルの遺品はアンステイスさんに受け継がれた(「史料室だより」No.79参照)。以前ご寄贈いただいた品々は学院内および史料室に大切に保管され、ミス・カートメル自筆のメモや書簡類、関係資料は『東洋英和女学院資料集 第4号』(英語版・2016年刊)『同 第5号』(日本語版・2017年刊)にまとめられている(「史料室だより」No.88参照)。

今回の来訪でも新たに大切な品々をご寄贈いただいた。その一つが、WMS (Woman's Missionary Society/婦人宣教師協会。ミス・カートメルが所属していたカナダ・メソジスト教会の婦人ミッション)のバッジで、中高部の英語礼拝でお話しされた

際、アンステイスさんが身に付けられ、その後学院にご恵贈くださった物である。このバッジは星と地球を示す球状が重なるデザインで、表面の星の先端の各部分には浮き彫りで“W M S”と“M C”の5文字が見える。“M C”は“Methodist Church of Canada”(カナダ・メソジスト教会)の略である。地球の上には“FOR JESUS”(キリストのために)と書かれている。



WMSのバッジ(表面。幅2.5cm)



バッジ裏面にはイニシャルが刻まれている。

裏面中央には飾り文字で、Martha Julia Cartmell (マーサ・ジュリア・カートメル)の頭文字MJCが確認できる。

WMS初の婦人宣教師として日本へ派遣されたミス・カートメルの傍らに、いつもあったであろうこのバッジをご寄贈いただき、ご親族からバトンを渡された私たちは、学院の歴史の重みとともに、ミス・カートメルの熱い思いを受け取めたのであった。(史料室)

## 大学開学30周年に寄せて

学長 池田 明史

東洋英和女学院の長年の夢であった四年制大学が産声を上げたのは、1989年（平成元年）のことであった。この年は、世界史的に見ても、大きな動乱の時期の始まりに重なる。通常なら半世紀から一世紀もかけて起こるような大事件がわずか数年のうちに連鎖的に勃発した。すなわち89年に東西冷戦が終わり、次いで91年のソ連邦崩壊を経て、米国が唯一の超大国として世界に新たな秩序を構築しこれに君臨するかのように見えた。グローバル・スタンダードとは、要するにアメリカン・スタンダードと同義であるかの如く看做された時代だったのである。そうした中で、「語学力があり、国内外で活躍できる教養をもった新しい女性育成のため」、東洋英和女学院大学はその歩みを始めた。

しかしその後の国内外の情勢は、フランシス・フクヤマが「歴史の終焉」で思い描いていたような、欧米的なグローバル・スタンダードへと単線的に収斂していくような展開とは程遠いものとなり、むしろサミュエル・ハンチントンが警鐘を鳴らした「文明間の衝突」へと突き進むのではないかと思わせる様相を示すこととなった。そして現在、大学開学以降の30年間のわれわれの世界を振り返ってみると、そこに通底しているのは「不確実性」と「不安定性」という二つの共通因子である。これを象徴しているのが、2001年9月11日の米国同時多発テロ事件であり、2011年3月11日の東日本大震災であると考えられよう。もとより、前者は国際的犯罪者集団による人為的殺戮であり、後者は自然災害による大規模破壊という相違はある。それでも、いずれの場合においてもわれわれは、どこかに「確実に安定した」価値観や秩序が現存していて、それによってわれわれの生活、あるいは生そのものが支えられているという信憑が、実は根拠に乏しい期待的幻想に過ぎなかったという事実を思い知らされることとなった。大学が育成を目指した「国内外で活躍できる教養をもった新しい女性」というイメージも、われわれを



取り囲む社会がそれなりに確実に安定していることを前提として掲げられていた。その前提が崩れ、そもそもこの世の中は不安定で不確実なのだという新たな事態のなかでは、「活躍」や「教養」や、あるいは「新しい女性」というカギ概念の内実そのものが、革めて問い直されなければならない。これこそが、発足して30年の歳月を経た現在、女子大としての本学が直面すべき根底的な課題にほかならないのである。

それと同時に、大学の一般的使命である研究についても、時代は変遷している。当初は人文学部の一学部で出発した本学が、やがてこれを構成する二つの学科が独立して、1995年には人間科学部と社会科学部との二学部へと展開してきた事実が象徴するように、大学の研究の基盤を成すのは科学である。科学的思考、科学的合理性に基づいて技術突破や新たな知見を切り開く営為を、われわれは研究と呼ぶ。研究者はそれぞれ個人的な好奇心に触発されて、問いを立て、その解明を試みる。その限りにおいて、一般社会の常識とは隔絶されていた。むしろ、社会的な常識にとらわれていれば、研究の進展は望めない。そのような信憑が、研究や研究者に対する一般社会のある種寛容な姿勢を支えていたのであった。しかしながら、AI（人工知能）やIoT（モノのインターネット）、あるいはクローン技術といった科学

の急速な、加速度のついた発達、われわれの個人的また社会的生活を無規制のまま規定し、人間の統制や統御の及ばない管理が現出されるのではないかと懸念が広がっている。ここに、知的好奇心を何よりも優先する研究・研究者の世界と、規範や常識に支えられた一般社会との間の関係を、これも根底的に問い直すべきだという主張が立ち現われ、国内外のさまざまな動きにつながってきている。

開学30年を振り返って、教育と研究それぞれの面でわれわれはこのような大きな課題を抱えている。さらに深刻なのは、いわゆる少子高齢化の趨勢にあって、大学全般が極めて厳しい淘汰の波に晒されつつある状況である。1980年代は基本的に右肩上がりで漸増していた18歳人口は、1992年にピークの205万人に達した。本学開学時の1989年には193万人強であった。その後は右肩下がりでの漸減傾向に転じ、ここ数年は120万人を切るか切らないか程度にまで落ち込んでいる。数年後にはこれがさらに底割れを起こすと予想されている。これに対して、30年前の国内の大学数は、520校強にとどまっていたが、本学同様に新設が認可される事例が続出し、現在では780校前後に膨らんでいる。減少する18歳人口と拡大する大学数というこの矛盾を架橋してきたのは、大学進学率、それも女子の進学率の単線的な上昇であった。全国平均で、本学開学時18歳の大学進学率は20%台後半に過ぎなかったものが、

現在ではほぼ倍増している。本学を志望する神奈川県や東京の女子に限れば、全国平均よりも10～20ポイントも高い。要するに30年前には高等教育に進まない、あるいは進んでも短期大学が主流だった18歳女子が、<sup>こぞ</sup>挙って四年制大学を目指すようになったことで、人口減・大学増という現象が成り立ってきたのであった。

しかし、首都圏の大学進学率の上昇はほぼ頭打ちとなり、今後18歳人口の底割れに伴って、われわれを含めて大学は生存を賭けた競争を強いられることになる。すでに地方では、「市場」からの退場を迫られつつある事例が少なからず見受けられる。こうした中で東洋英和女学院大学が、開学当時の初志を貫徹し、次の30年に向けて前に進んでいくためには、何よりも建学理念である「敬神奉仕」の具体化・実質化をはからなければならない。不確実で不安定な時代であればこそ、確実に安定した引照基準、すなわち「敬神」の重要性は決定的に大きなものとなるだろう。また、研究と社会との橋渡しとなるのは、研究が社会の切実な要請にどのように応えていくべきかという問題関心、すなわち「奉仕」の精神にはかならない。その上でわれわれは、教育内容のさらなる充実や収容定員の適正化、施設の利便性向上といった喫緊の諸課題に積極的に取り組んでいく所存である。最後に、先般挙行された大学開学30周年記念行事での式辞を右頁に採録して、攔筆する。

### <東洋英和女学院大学 開学30周年記念行事>

日時 : 2019年6月29日(土) 13:30~16:30  
 場所 : 東洋英和女学院大学 5201教室(第1部・第2部)  
 中央館1階(第3部)

プログラム: 第1部 記念礼拝  
 式辞 学長 池田 明史  
 祝辞 横浜市長 林 文子  
 第2部 記念コンサート  
 演奏: 東北ユースオーケストラ  
 第3部 茶話会



池田学長式辞



記念コンサート



茶話会

## 開学30周年記念式辞

初代学長であった朝倉孝吉先生は、開学10周年にあたってピーター・ドラッカーの次のような言葉を引用されて、私どもに注意を喚起されております。「人類の進歩は、変革と継続の必要性の二つの矛盾する命題をいかに調和させるかにかかっている。組織内ですでに行っているものをよりよく遂行する経営管理的な能力は、継続に属する。古いものを壊し、新しいものを創り出すことが、変革を意味する」。

このピーター・ドラッカー教授は、経営学者とか未来学者に類別されることが多いのですが、決してそのような浅薄な経営専門家ではありません。ナチズムに蹂躪されていく1930年代のヨーロッパの状況を目の当たりにして、狂気の全体主義の本質について研究を始めたのが彼の出発点でありました。その成果は1939年に刊行された処女作『経済人の終わり』に結実しますが、これは今日に至るまで全体主義分析の名著として高く評価されています。面白いのは、彼がこの本の執筆の過程で日本の明治維新を知り、それが「変革と継続の必要性の二つの矛盾する命題を調和させた」実例であると確信して、終生日本への関心を持ち続けたということでしょう。

しかしながら、ドラッカー教授が高く評価する明治維新を成し遂げてから151年を経た現在、根底的でドラスチックな変化を遂げつつある世界の潮流から日本は逸脱しつつあるように思えます。本学が開学した30年前、1989年すなわち平成元年は、いわゆるバブル景気のピークにありました。すでに日本経済の規模は、明治維新から1世紀を経た1968年にドイツを抜いて世界第二位となっておりました。振り返ってみれば、変革なしに発展できる時代は70年代で終わり、80年代は内外の情勢変化に応じて新たな発展モデルを構築していくべき時代だったはずで、この東洋英和女学院も、そうした経済や社会のモデルチェンジを見据えて、短期大学から四年制大学への転換を構想したのでした。

現実には、日本は古いモデルから脱皮しないまま、バブル景気を迎えることになりました。大多数の日本人がそれを日本の強さだと錯覚していました。変革への推力は失われ、惰性による継続が幅を利かせるようになりました。そして、1991年にバブル景気が崩壊します。あとに残されたのは長期にわたる停滞状況であり、社会・経済・政治の閉塞状態にほかなりません。本学が開学してから今日までの30年間の歩みは、平成という元号のそれと重なります。その平成の時代を象徴する言葉は、誠に遺憾ながら「停滞」と「閉塞」というネガティブなものにならざるを得ないかも知れません。果たして本学の来し方がこれらの言葉と無関係だと言い切れるかどうか、自問しなければなりません。

もとより、いま私どもに求められているのは過去を自虐的に懐古することではありません。本学は、これから先の30年を見据え、NEXT30という名を冠した長期将来構想を策定しつつあります。すでに、付加価値を生み出す産業や技術が、モノから情報やサービスにシフトしてから久しくなったこの時代、元号も新しくなりました。新元号「令和」の時代にあっては、そのような情報、サービスそして知識集約型産業が主役となります。環境保全という価値観もいっそう定着していくでしょう。20世紀においてはわが国が勝ち組となったモノ作り産業も激変するはずで、要するに、いま、私どもが足を踏み入れようとしている新たな時代は、イノベーション競争の時代になります。イノベーションと言っても、それは単なる技術革新だけを意味しません。「改良」でも「改善」でもない、新たな技術突破のほかに、新しい付加価値を創出するための制度や慣行の改革が必要となってきます。すなわち、システムのイノベーションが求められているのです。その前提となるのは、新たな時代の新たな要請に柔軟に向き合うことのできるような、人々の意識の変革にほかなりません。そこにこそ、本学をはじめとする高等教育機関の存在意義があるのだと言わなければなりません。冒頭にご紹介したドラッカー教授の言葉に戻れば、「変革と継続の必要性の二つの矛盾する命題」の調和とは、本学にとっては「敬神奉仕」という建学理念を確実に受け継ぎ、これを堅持しつつ、その上で「古いものを壊し、新しいものを創り出すこと」への挑戦を意味します。

東洋英和女学院大学の開学30周年を記念するこの場において、私ども教職員は革めてそのような高みを目指す決意を共有したいと切に望みます。最後に、アメリカの神学者ラインホルト・ニーバーの有名な祈りの言葉を以て、私の式辞を締め括ります。

「神よ

変えることのできるものについて

それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては

それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。

そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを

識別する知恵を与えたまえ。」

## 〈東洋英和の先生がた〉3 池田 守男先生

### 与うるは受くるより幸いなり

### —サーバント・リーダーシップに生きる—



#### 墓石に刻まれた聖句

「与うるは受くるより幸いなり」。池田守男先生と接した多くの人が、この聖句を生涯大切にし、この聖句を実践するように努めていた先生のお姿を思い出すのではないだろうか。池田先生は、2002年に東洋英和女学院評議員に、2004年に理事、その後2005年6月に理事長に就任し、さらに2007年4月には院長も兼任され、東洋英和を導いていく重責を担われた。しかし、在職中の2013年5月に急逝された。明るい陽のあたる墓所にある先生の墓石にも、「【あた】与ふるは受くるよりも幸福なり」の聖句が刻まれているという。

#### 神学部出身の異色の企業人

東洋英和の理事長に就任される前、池田先生は大手化粧品会社資生堂の社長・会長として経営手腕を発揮し、中国市場の拡大を先取りした国際展開を指揮したことで耳目を集めていた。その経歴は、牧師を目指して東京神学大学に入学したものの、60年安保闘争の騒乱の中で牧師にはならず企業に就職し、神学部出身であれば「人に仕える」のが得意だろうということで秘書室に配属され、歴代の5人の社長に仕え、ついには自らも社長となる異色のものだった。

競争原理や新自由主義が広がる世相の中で、「自分の利益ばかりを追求し、社会全体の充実や幸せを度外視する風潮が強まっている。このままでは日本は精神的に滅びる。本来、経済活動というものは人の生活を豊かにする手段であり、目的ではない」と断言し、経営改革を進めていったその姿勢には、多くの財界人や政治家からの支持が寄せられていた。

#### 召命のもと東洋英和へ着任

池田先生の秘書を務めた谷川祐子氏（元中高部社会科教諭、職員）にはたくさんの思い出がある。谷川氏は「いろいろなところからの依頼を神から与えられた使命と捉え、出来る限り引き受けていらっ

しゃいました。政府関係では教育再生会議座長代理、内閣府公益認定等委員会委員長など、重要なお役目を担ったほか、教会からの伝道講演の依頼に対して、どんな地方の小さな教会であっても足を運ばれました。スケジュール表は分刻みでびっしりと予定で埋め尽くされていて、お忙し過ぎるのではないかと、ハラハラしていました。しかし、その使命感ゆえに多忙の中、東洋英和女学院の理事長・院長をお引き受けくださったのだと思います。感謝するばかりです」と語っている。経済界から教育界へ、一見突飛のようではあるけれども、池田先生の根本には常にキリスト教の教えが息づいていたという。

ダンディズムを貫き、週ごとに散髪し、身だしなみにはいつも気を配っていた先生は、一見近寄りたがたい硬派な雰囲気ではあったけれども、実際は、体育祭で元気すぎるくらいに走り回る英和生の姿に目を細め、小学部の子どもたちのミュージカルの歌詞に感激してそれを口ずさんでしまうなど、学校行事には極力参加し、在校生と接する機会を大切にしていた。追悼記念日礼拝の中高部合唱部による合唱、高等部卒業式のロッキーニの「信仰・希望・愛」の合唱にはいつも涙を流されていたという。

東洋英和の野尻キャンプサイトの教育的意義にも深く共感し、一時は存続が危ぶまれたキャンプサイト再建を後押ししたのも池田先生だった。ご自身もヨットや水泳を得意とし、山野草の栽培にも熱心だった先生にとって、野尻は「神とのつながりにおける自然との関わりをもてる場」として、東洋英和には無くてはならないものだと考えていた。

#### 東洋英和の歴史を見るかたちに

学院創立120周年の翌年に、理事長に就任した池田先生は「120年の歴史を持つ東洋英和」というフレーズを何度も耳にするけれども、その120年の歴史を実感する場所や物が存在せず、外部の人には全くその歴史が見えない…ということに気づき、

2007年に本部・大学院棟のロビー部分に「学院資料展示コーナー」を設置する。さらには学院創立の精神、東洋英和を築いてきたカナダの婦人宣教師の先生がたの思いがどのようなものであったのかを知ること、今後、東洋英和が進むべき道を確認していきたいと考え、創立125周年には『カナダ婦人宣教師物語』の刊行を進めていく。池田先生は、現在の学校運営を考える上で歴史に立脚することがいかに重要であるかを常日頃語り、語るだけでなくそれを実際に目に見えるかたちで示していったといえる。

### 維持協力会としての「楓の会」の発足

そして、企業経営者としての経験から、東洋英和の後援会会員のお父様方ともしばしば意見交換していた池田先生は、娘さんが東洋英和を卒業した後もずっと東洋英和とのつながりを持ち続けたい熱心な保護者の方々がいることを知り、同窓生だけでなく末永く英和のサポーターの方々が集えるような仕組みも考案した。それが学院の維持協力会としての「楓の会」の発足となり、現在に至っている。「楓の会」の原点には、広く永続的なつながりによる学院関係者の結束と学院への支援が構想されていたことを忘れてはならないだろう。

### 学校を文化の豊かさを育む場所に

池田先生は、忙しい仕事の合間をぬって時間さえあればオペラ、宝塚、バレエ、歌舞伎、ミュージカル、新派にいたるまで幅広いジャンルの舞台鑑賞に親しみ、クラシック音楽のコンサートからジャズライブにまで足を運んでいたという。そして、読書に関しても院長室の書棚には経営論から文学や美術まで、たくさんの分野の書籍が並んでいた。座右の書は新渡戸稲造の『武士道』で、人生の節目ごとにこの本に立ち返り、生きる指針を与えられていたそう。骨太な信仰と教養を軸としつつ、人間として生きる上での文化の豊かさを池田先生はどのような時でも大切にしていた。

そして豊かな文化を育む重要な場所である「学校」の教育環境をいかに整えていくかも学校経営者としての池田先生の大きな課題であった。六本木五丁目西地区市街地再開発への参画を東洋英和が決断していったのは、まさに池田先生の時代であった。2011年7月、東日本大震災ののちに発行された「東洋英和女学院同窓会だより」第23号には同窓会総会の池田先生の「東洋英和の現状と将来」講演要旨が掲載されている。「…英和としてはこの六本木の

地において安心・安全な環境を守りたいのだが、現実問題として個別に開発が進むと街として收拾がつかず、風紀も乱れる。これを食い止めるためには全体開発に参加し、安心・安全が保たれる教育環境を創ることが必要ではないだろうか。「保守とは革新なり」、現状維持では新しい時代に向かって出発することができないとし、大きな決断を下していった池田先生のまなざしの先には、地域の歴史と文化をふまえた文教地区として新しいまちづくりが展開していくビジョンがあったことが、残された先生の数々の発言からうかがえる。

### サーバント・リーダーシップと敬神奉仕

池田先生には経営学者の金井壽宏氏との共著で『サーバント・リーダーシップ入門—引っ張るリーダーから支えるリーダーへ』（2007年）という著作がある。先生は、高い志や社会への奉仕の心を持ち、ミッションやビジョンを共有することによって、その組織のメンバーに対し、リーダーが引っ張るのみならず、サポートし支えていくというリーダーシップの在り方を提言し、かつ社長をしていた資生堂でもこの実践に努めた。それは東洋英和の理事長、院長の職務においても同様であり、「一奉仕者として子どもたちを支える存在になりたい。学院でも私が一番下にあり、一番上にいる一人ひとりの在校生、そしてその在校生と接する教職員を支える存在になりたい」と語っていたという。それこそが学院の標語である「敬神奉仕」の池田先生にとっての具現化であった。生涯の終わりまで学院にご奉仕して下さったことに心からの感謝を捧げたい。

#### 池田 守男（いけだ・もりお）先生 —略 歴—

1936年12月25日	香川県高松市に生まれる
1955年11月13日	受洗
1961年	東京神学大学卒業
同年	株式会社資生堂入社
2001年	株式会社資生堂 代表取締役社長
2002年10月	東洋英和女学院 評議員
2005年	株式会社資生堂 取締役会長
2005年6月	東洋英和女学院 理事長
2006年	「日本宣伝大賞」「新渡戸・南原賞」受賞
2007年4月より	東洋英和女学院 院長を兼任
2013年5月20日	逝去（享年76歳）

内閣府公益認定等委員会委員長、経団連評議員会副議長、東京商工会議所副会頭、日本商工会議所特別顧問、教育再生会議座長代理などの公職を歴任。日本基督教団銀座教会会員。

## 利用統計 (2019年4月～2019年9月)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月
展示見学者数		118	86	153	103	94	110
展示見学者区分	学内関係者	50	32	69	35	19	17
	一般	68	54	84	68	75	93
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
資料閲覧者数 (累計)		5	1	6	7	2	2
閲覧者区分	本学学生・生徒				1		
	現教職員			2		2	1
	旧教職員			1			
	同窓生・学院関係者			2	1		
	同窓生 (研究者)						
	他校研究者・学生	3	1	1	3		
利用の目的	一般	2			2		1
	年史編集			1	3		
	著述・論文作成	2	1			2	1
	伝記資料調査	1		1	1		1
	記録類の調査・研究	2		1	2		
	学院広報関係						
資料の種類 (重複あり)	その他			3	1		
	東洋英和関係	3	1	3	5	2	2
	カナダの教会関係	3		1	1		
	村岡花子関係			1			
	周辺地域史			1	1		
その他				1			
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
月別レファレンス件数		5	2	10	9	5	8
質問者の区分	本学学生・生徒						1
	現教職員	2	1	6	6	1	4
	旧教職員			1			
	同窓生・学院関係者			2	3	1	
	同窓生 (研究者)						
	外部研究者・学生			1		1	
	外部研究機関	1	1				
質問内容 (重複あり)	一般	2				2	3
	資料所蔵調査	1		7	4	4	2
	写真所蔵調査						2
	事項調査	2	2	3	5	4	7
	その他	2			1		

## 史料室の活動より (2019年4月～2019年9月)

(☆は複数回)

### 2019年4月

- ・ 新任者オリエンテーション 展示コーナーにて歴史紹介 (松本)
- ・ 『カナダ婦人宣教師物語』改訂版、学内各所に配布
- ・ 『カナダ婦人宣教師物語』初版2刷・改訂1刷正誤表データ作成。学内各所に配布
- ・ 「史料室だより」No.92 執筆・編集作業
- ・ 照会—総務課より、幼稚園のぎんなん献金は横浜校地チャペルの建設の寄付のため始まったのか?→ それ以前に荒牧富士子園長の頃に開始
- ・ Wilna Thomas宣教師の評伝 (コピー) を入手
- ・ ☆コロンビア大学キャロル・グラック教授招聘準備
- ・ 校正—大学史資料協議会 HP掲載文面
- ・ ☆NHKワールドによる、カナダの日系人強制収容所における本校のハミルトン元校長の活動についての番組制作に調査協力
- ・ 照会—賀川豊彦記念松沢資料館より、賀川の妻ハルと村岡花子の夫である村岡徹三の父、平吉との関わりについて→村岡家をご紹介
- ・ 出張—日本ユネスコ協会連盟 (史料室: 松本・三笠)、村岡花子の資料調査
- ・ 星野学園より、創立者の「星野りち」は東洋英和女学校で教鞭を取っていたとご教示あり
- ・ 学院創設者ミス・カートメルの曾孫のAnstice Blom氏とMary Anstice氏親子が来校。中高部で英語礼拝のち六本木校地各部を見学。築地、旧居留地周辺も見学。夜は桜プロジェクト有志による歓迎会。2日目は横浜港見学のち大学見学。その後、姉妹校の山梨英和学院を訪問
- ・ 校正—「楓園」88号、村岡花子記念講座チラシ、「同窓会だより」31号

- ・ 照会—エロイズ・カニングハムについて→関連資料を提供
- ・ 校正—「東京人」2019年7月増刊号、東洋英和女学校の記事
- ・ 出張—麗澤大学 (史料室: 松本)、モンゴメリ会議について
- ・ ☆来室/調査—他校大学院生。宣教師、東洋英和関係資料を調査

### 2019年5月

- ・ 桜プロジェクト植樹5周年カナダツアー参加 (史料室委員会委員長: 山本香織小学部長、史料室: 三笠)
- ・ 「史料室だより」No.92 発行
- ・ ☆村岡恵理著『アンのゆりかご』翻訳事業準備
- ・ 執筆—港区男女平等参画センター情報誌「OASIS」61号ブックレビュー『アンのゆりかご』書評
- ・ 照会—山梨英和学院史料室より、ブラックモアの在職期間、WMSの訳語について
- ・ 学院資料展示コーナー企画展のため大学資料の整理・調査
- ・ 出張—大学史資料協議会東日本支部総会 (史料室: 松本・三笠)、東京経済大学にて

### 2019年6月

- ・ 同窓会総会参加 (史料室: 松本・三笠)。史料室だより定期購読者を募集
- ・ 「楓園」89号の構成案についてコメント
- ・ 来室/閲覧—歴代の卒業生ご家族。卒業アルバムや野尻・修養会の写真などについてご解説いただく
- ・ 調査—大学図書館に1987年当時の大学設置認可スケジュールについて質問。『私学必携』借出
- ・ 来室—中高部ET会 (英和ティーチャーの会) の後、旧教員数名が来室。宣教師との交流、百年史執筆者などについてご教示いただく
- ・ ☆来室/調査—港区教育委員会、執筆担当研究者。港区教育

- 史の編纂にあたって東洋英和の幼稚園における教育について
- ・照会—学長より、開学前後の大学事情について→「史料室だより」No.37の誌面等を紹介
- ・大学図書館除籍本、移管入力作業
- ・来訪—関西学院院長舟木謙先生。中高部、展示コーナー、史料室をご案内
- ・照会—生涯学習センターより、『村岡花子文庫 和書目録』閲覧方法について→展示コーナー、各部図書館、図書室で閲覧可能
- ・照会—中学部長より野尻キャンプ資料について
- ・照会—卒業生より、以前、中高部図書室にあった芥川龍之介から片山廣子への献辞のある本の保管場所は？→現在は史料室で保管
- ・学院資料展示コーナー「大学開学30周年記念企画展 三保の森にキャンパスが誕生するまで—資料にみる大学開学への歩み—」設営
- ・照会、来室／調査—本学大学教員より、宣教師ミス・ショアの執筆記事「Utopia」(1936年3月「教文館月報」掲載。和文と英文併記)について→史料室に所蔵がなく、村岡家よりコピーをいただく
- ・管財課と収蔵庫の温湿度調整について確認
- ・来室／調査—中高部教員、六本木界隈の文学者の足跡について→「THE AZABU」バックナンバーに関連記事あり
- ・管財課より、中高部地下倉庫機械室のヴォーリズ校舎の備品リストをいただく
- ・桜プロジェクト・カナダツアー文集作成協力
- ・24日 2019年度 第1回史料室委員会
- ・照会—中高部よりスクールカラーに込められた意味について→起源とされているマウントアリソン大学に在学中の卒業生を通じて先方のアーカイブズに問い合わせるも確定資料なし
- ・見学—展示コーナー、元立教女学院理事長平塚敬一先生とご友人
- ・桜プロジェクトのリユニオンへ映像提供
- ・WMS研究会に参加(史料室：松本・三笠)。ハワード・ノルマン夫妻の『日本の百年史』翻訳原稿(部分)を講読

#### 2019年7月

- ・☆大学フレッシュマンセミナー自校史講義担当(松本)
- ・大学図書館内の史料室を見学。旧短期大学所蔵図書のうち、おもに宣教師が寄贈した蔵書について調査。移管を依頼
- ・☆来室／調査—中高部地歴部。1964年オリンピックと英和について(楓祭展示のため)
- ・野尻夏期行事しおり・キャンプソング保管数の確認
- ・照会—本学大学教員より、ミス・ブラックモアから村岡花子への言葉について
- ・築地居留地研究会特別講演会 村岡恵理氏「村岡花子と『赤毛のアン』」に参加(史料室：松本、酒井・谷川)
- ・旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージ清掃奉仕とオーナーとの交流会(同窓会長、同窓生有志、史料室：松本・三笠、酒井・谷川ほか参加)
- ・NHK取材(中高部・史料室)。ミス・ハミルトンをめぐって
- ・各部部長、学院教職員で、六本木五丁目の埋蔵文化財発掘調査見学。谷川章雄早稲田大学教授が案内
- ・来室／調査—ヴォーリズ建築の英和での記録保存方法について
- ・山梨英和学院130周年記念展示・記念講演会参加(史料室：松本・三笠、酒井・谷川)
- ・来室／調査—愛隣団ご担当者。年史編纂のため、ミス・アレンと愛清館、バット博士などについて
- ・出張—野尻キャンプサイト(史料室：松本・三笠)、旧キャンプサイト(宮沢)を高等部長たちと訪問・調査
- ・所蔵調査—野尻キャンプサイトに置いてある過去のしおりなど
- ☆来室／調査—都立小石川高校OGOBメンバー。伊藤長七と東洋英和女学校について
- ・照会—渡邊里雨、里枝、千鶴代、青木かく子について→「初期スクラップブック」、『東洋英和女学校五十年史』などを参照

#### 2019年8月

- ・☆校正—港区教育委員会より道徳副読本掲載の村岡花子の挿話について
- ・幼稚園母の会資料整理
- ・☆来室／調査—本学大学教員。東洋英和関連資料など

- ・展示案内—関東地区のキリスト教学校聖書科教員に解説
- ・照会—高等部長よりミス・ハミルトンとYWCAについて→『東洋英和女学校五十年史』の記述などを紹介
- ・照会—他校研究者より、上田保母伝習所などの英語表記について
- ・ヴォーリズ学園の軽井沢での研修会・講演会に参加(史料室：松本・三笠、谷川)
- ・NHK WORLD PRIMEで「Hope in the Dark」(ミス・ハミルトンを紹介)を放映
- ・「史料室だより」No.93 執筆・編集作業
- ・照会—卒業生の間島愛子について→あまり資料の所蔵なし
- ・照会—海外研究者より、「T.E.ニュース」と共にあった英語資料について→「平和と友好」という内容、1933年ごろのもの。「T.E.ニュース」の付録のように配布されていたか？

#### 2019年9月

- ・村岡花子文庫展示コーナー企画展準備
- ・照会—改革推進課より、昔の給費生について(9月7日の朝日教育会議のため)
- ・校正—学生支援課より2020年度学生手帳
- ・地下2階書庫改善のため管財課と協議
- ・9日 2019年度 第2回史料室委員会
- ・山本香織史料室委員長より再開発に向けた史料室の要望を提出するよう要請あり
- ・来室—水谷悟准教授(静岡文化芸術大学)ゼミ生12名。展示コーナー、史料室見学
- ・照会—中高部教員より、高三修養会の始まったのはいつか？
- ・大学図書館より、展示のため『ぐりとぐら』原画を借り出し
- ・学芸員課程における博物館実習のため本学学生を史料室で受け入れ。展示の設営などを実際に行う

#### 【おもな移管資料】

- ・幼稚園より、昭和39年以降の母の会関連書類多数(茶箱2箱ほか)
- ・幼稚園より、布絵本の写真数点。「昭和62年度 東洋英和幼稚園 絵本資料写真」ミニアルバム1冊
- ・中高部聖書科研究室より、YWCA活動ほか写真一式(年代不明なもの多数あり)、スライド(1975年文化祭ほか)、聖書(1935年発行、「東洋永和女学校」の印あり)
- ・小学部卒業アルバム、欠けていた年度分5冊受領

#### 【おもな受贈資料】

- ・大学開学時の記念品マグカップ(2組)、大学関係資料多数
- ・Anstice Blom氏より
  - ①ミス・カートメル関連の書簡4点
  - ②ミス・カートメルのイニシャル入りのWMSバッジ
- ・ファンへの村岡花子からの手紙(額入り)
- ・大正14年3月卒業式写真、年史類と学院関係出版物多数、校章入りのミニタオル2枚
- ・制服(中高部 冬服 フランセのカバー付き)、井上健之助先生による短冊「いつか来た 気がして 秋の寂光院」(蜀堂)
- ・1942年卒業アルバム、写真36枚
- ・山梨英和学院史料室より創立130周年記念ブックレット、記念展示・周年記念チラシ
- ・元中高部教員より、1996年中高部校舎献堂式の記念音源をご自分で編集したもの
- ・校舎落成記念文鎮1933年。『長野県町教会百年史』
- ・「楓」第6号、校舎落成記念文鎮1933年(木箱入)、卒業アルバム1936年
- ・第1回卒業生であり教員だった渡邊里雨曾孫の方より、「はなかたみ」(渡邊里枝遺稿集)、渡邊里雨の歌集、渡邊里枝の女学校時代の写真画像など多数
- ・元大阪市立精華小学校・幼稚園資料(設計は阿川佐和子氏の祖父である増田清氏)
- ・元中高部教員より、ヴォーリズ校舎閉館関係映像資料「(8ミリビデオ3巻)、年史類、中高部教職員写真、プリント類、クラス発表会台本3冊
- ・野尻キャンプサイト撮影画像8点(卒業生 小倉秀子氏撮影)
- ・高等部卒業リング他多数
- ・片山廣子関連資料3点、楽譜「さるかに合戦」
- ・戦時中の卒業証書(1945年3月卒)、小学部学年だより、中

- ・高部学校用品ほか多数
- ・明治時代の修了証書／卒業証書一揃い15点
- ・YWCAのカード、「シオン班」のカード（生徒達の署名入り）、学童疎開の写真コピー

【書籍・雑誌・論文】

- ・浅野泰子記念文集刊行委員会『いこいのみぎわに』
- ・関西学院大学学院史編纂室より『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』
- ・「東京人」2019年7月増刊号（画像提供・文章校正協力）
- ・『キリシタン 日本とキリスト教の469年』
- ・押切寛子（卒業生）『石川信夫の中国詠』鶴書房、2019年
- ・興望館より『興望館100周年記念誌 希望への扉』
- ・村岡恵理（卒業生）『ラストダンスは私に』光文社、2019年
- ・荒井通子（卒業生）『メイ・ジェフティの死』『時省記 平時忠卿検非違帖』『古く美しきものを求めて』『あの世探し』
- ・松本侑子 新訳『赤毛のアン』『アンの青春』文春文庫、2019年
- ・西澤英和「昭和初期建築技術を検証する 東洋英和女学院中等部校舎を巡って」（建築の技術「施工」抜刷）

- ・清水麻利子『片山廣子短歌研究 芥川龍之介との「うた」の道行』角川書店、2019年
- ・ヴォーリズ学園安川千穂先生より『近江兄弟社学園をつくった女性 一柳満喜子』ほか
- ・『日本甜菜製糖100年史』。牧山清砂（帝国製糖会社専務取締役。東洋英和の第一回後援会発起人）について調査協力したため

【おもな 画像データ・資料提供】

- ・「東京人」2019年7月増刊号へ、ミス・カートメルの写真1点
- ・山梨英和学院史料室へ、展示やパンフレット作成のため上田保母伝習所の画像1点、ミス・カートメルの画像1点
- ・麻布十番祭での展示のため永坂孤女院の画像2点
- ・日本テレビ「超問クイズ」へ、『赤毛のアン』初版本表紙画像1点
- ・大学院へ、村岡花子文庫展示コーナー画像3点
- ・中高部へ、学校案内用宣教師のサイン画像、王女会、YWCAの画像多数
- ・学院「説教集」作成のため旧チャペルの画像5点

## 村岡花子文庫展示コーナーご案内

東洋英和の卒業生であり、翻訳家・文学者として活躍した村岡花子は、日本の家庭に良質の文学を…という願いから、多くの絵本、児童文学、少女小説を翻訳・創作し、日本の文学界にはなかった「家庭文学」と呼ぶべきジャンルの伸展に寄与しました。今回の展示では学院所蔵の花子の蔵書コレクションである村岡花子文庫から多数の作品を紹介し、花子の業績をたどっていきます。

### <企画展> 村岡花子と「家庭文学」

—大人も子どもも共に楽しむ作品を創る—

会 期：2019年10月1日（火）～2020年4月28日（火）

入 場 料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます。

展示場所：東洋英和女学院 六本木校地 本部・大学院棟1階ロビー  
（※洗面室はご使用になれません）

公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外 9：00～20：00  
（土曜日は9：00～19：00）

※同時開催 学院資料展示コーナー企画展  
東洋英和女学院大学開学30周年記念展示  
「三保の森にキャンパスが誕生するまで  
—資料にみる大学開学への歩み—」  
（2020年2月1日まで）

村岡花子と「家庭文学」  
—大人も子どもも共に楽しむ作品を創る—  
Murakami Hanako and *Katei Bungaku* (Family Literature)  
—Creating literary works that adults and children can enjoy together—

日本の家庭に良質の文学を…という願いから、村岡花子は多くの絵本、児童文学、少女小説を翻訳・創作し、日本の文学界にはなかった「家庭文学」と呼ぶべきジャンルの伸展に寄与しました。今回の展示では学院所蔵の村岡花子文庫から多数の作品を紹介し、花子の業績をたどっていきます。

In the hope of providing high-quality literature to Japanese families, Murakami Hanako translated and created many picture books, children's literature and girls' novels, contributing to the development of a field called "Family Literature" that did not previously exist in Japanese literature. In this exhibition, we will introduce many works from the Murakami Hanako Library, a collection of the Toyo Eiwa Archives, and trace Hanako's achievements.

2019年10月1日(火)～2020年4月28日(火)まで  
展示時間 公開日 9:00～20:00  
休館日 9:00～19:00

### 🌸 既刊の「史料室だより」も読めます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL: <https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

### 🌸 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室 〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40

Tel 03-3583-3166（直通） Fax 03-3583-3329 E-mail [archive@toyoeiwa.ac.jp](mailto:archive@toyoeiwa.ac.jp)